

山梨県甲州市安道寺遺跡の特殊な土器埋納遺構

保坂康夫

はじめに

1. 安道寺遺跡と報告書の記述について
2. 土器の記載

3. 埋納状態の再検討

4. 埋納行為の要点

おわりに

はじめに

山梨県立考古博物館は、毎年秋に特別展を開催しており、平成20年度は、第26回として「埋められた財宝―大形装飾土器、銅鐸、そして埋蔵金―」を実施し、「埋納行為」をテーマとして、縄文時代草創期の有舌尖頭器の埋納遺跡、銅鐸埋納、鎮壇具、中世の埋蔵銭、そして近代の地鎮祭跡まで、通時代的な展示に取り組んだ。

その中で、縄文中期の井戸尻期から曾利期初頭を中心とした大形装飾突起ないしは把手を持つ土器が、意図的に埋納されている状況を、出土状態の写真などを示しながら展示した。その中心的な展示として甲州市塩山中萩原に所在する安道寺遺跡の巨大装飾土器の埋納遺構について、出土土器（写真1）の展示ばかりでなく、埋納状態の原寸模型と写真による展示（写真2）をおこなった。展示では、報告書（小林・里村1978）の記述に従い、埋納行為の過程を説明したが、原寸大の土器を粘土で模造し、それを壊して発泡スチロールで製作した土坑断面に、出土状態のとおり配置する予定であった。そのため、より詳細な分析を行うため、土器の写実実測と展開写真撮影を、小川忠博氏に委託して実施し、出土状態の写真や図面から、詳細な埋納過程を復元し、展示に生かす予定であった。しかし、分析を充分尽くせぬまま、特別展開催に至ってしまった。ここでは、遅ればせではあるが、その責をはたしたい。

1. 安道寺遺跡と報告書の記述について

甲州市塩山中萩原に位置する安道寺遺跡は、昭和51年（1976）に畑地灌漑用水路工事に伴い発掘調査された、縄文時代中期の集落遺跡である（第1図）。幅8m、長さ74mにわたって設定された調査区から、五領ヶ台期から曾利Ⅱ期までの堅穴住居跡が19件検出されている。周辺には、重郎原遺跡、柳田遺跡、殿林遺跡という縄文遺跡が知られており、ひとつの縄文文化圏を形成している。報告書は、小林広和氏と里村晃一氏の執筆・編集により昭和53年に刊行されている（小林・里村1978）。また、小林氏の論文の中でも記述・分析されている（小林広和1986・1987）。

今回分析する埋納遺構は、曾利期の17号住居址内に掘り込まれた、最大径65cm、深さ70cmの土坑である（第1図）。

埋納されていた土器は、3個体ある。高さ82cmもある曾利Ⅰ式の渦巻把手状装飾（小林2003）を4単位もつ巨大装飾土器が1個体あり、大破片に分割されているものの、接合作業によって完形土器に復元された。これをA個体と呼ぶ。その個体の渦巻把手状装飾にうりふたと表現できるほど近似した渦巻把手状装飾部分が4点あり、おそらく1個体と思われる。これをB個体とよぶ。3番目は、高さ38cmの小振りな土器で、完形状態で土坑底部に横たえられていた。これをC個体と呼ぶ。

それぞれの出土状態は、次のように記載されていた。

「土坑底部には」C個体「が横位に埋設されており、その上には8個の把手と一個体の大型土器片が、覆いかぶさる様な状態で検出された。8個の把手と一個体の横位の土器にふたをするかの様に埋設し、残りは順次不規則に埋設してあるのが認められた。胴部破片はこれらをかぶせる様なかたちで認められた。8個の把手のうち4個は胴部と接合し、完形土器を故意に破壊し、埋設したものであることが判明した。横位埋設土器中・底部付近には、焼土塊が検出されている」（報告書P19～20）。

また、別項では「把手付土器等を出土した土坑」（報告書P104）として、次の記述がある。

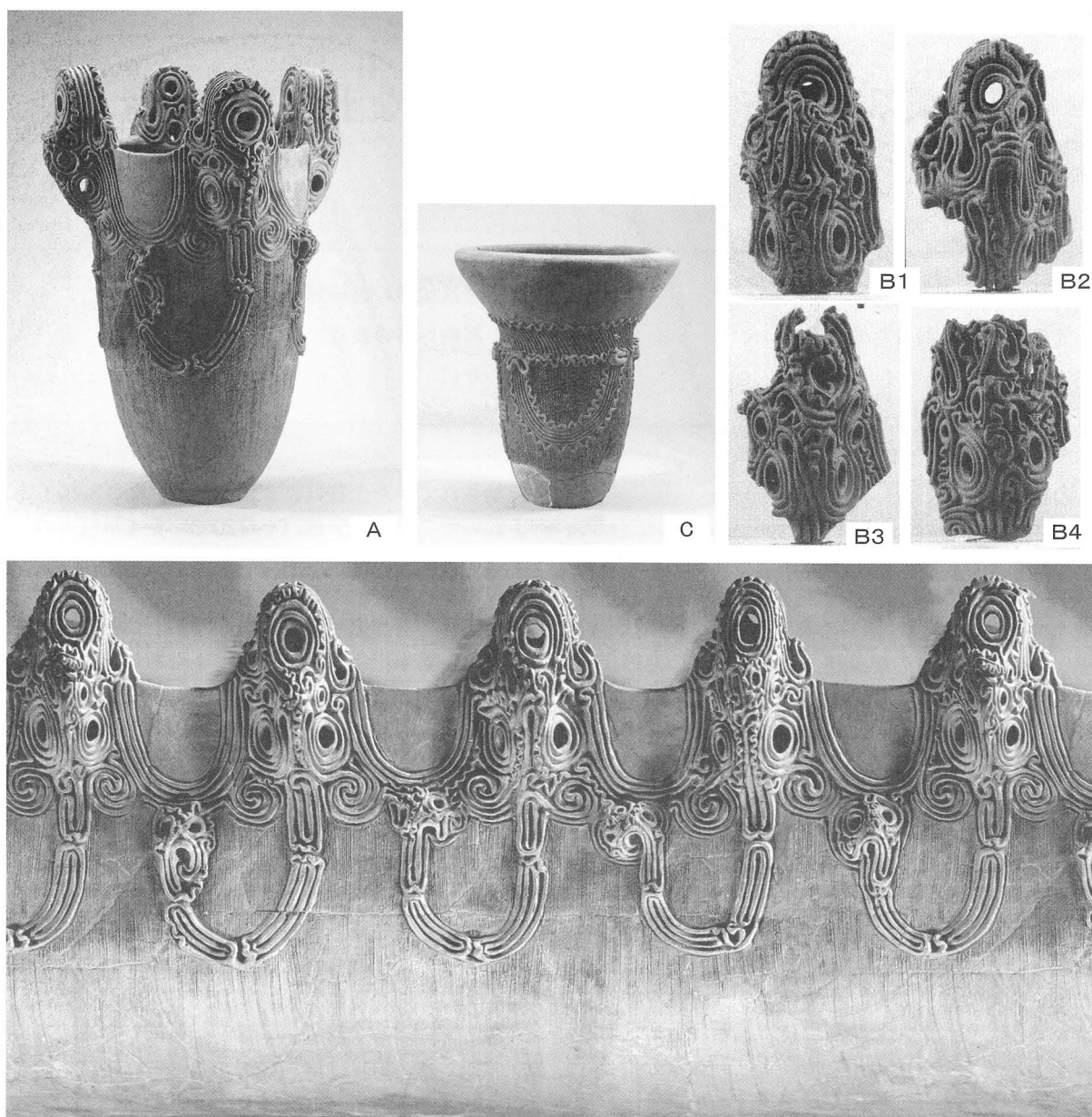
「17号址内の土坑に埋設されたもので、まず完形土器内に焼土塊を生ずる行為がなされた後に土坑内に埋設され、1個の把手でふたをし、さらに3個の把手を土器の周囲に入れ、4個の把手の大形完形土器を破壊し、把手を埋めた後、これらを覆う様に胴部破片を納め完了する一連の行動が認められるが、この行動がいかなる原因に依るものであったかは、横位埋設土器の収納品が現存しない今となっては想像の域をでるものではない。」

この土坑は17号住居址内にあり、住居址出土土器とほぼ同時期であるものの、住居址が構築される前か、廃絶後かいずれかに構築されたものかは判断されていない。

2. 土器の記載

A個体

A個体については、報告書では写真が提示され（P.L. 40）、発掘を担当した小林広和氏が2003年に発表した論文



A個体展開写真

写真1 安道寺遺跡土器埋納遺構出土写真（撮影；小川忠博氏）

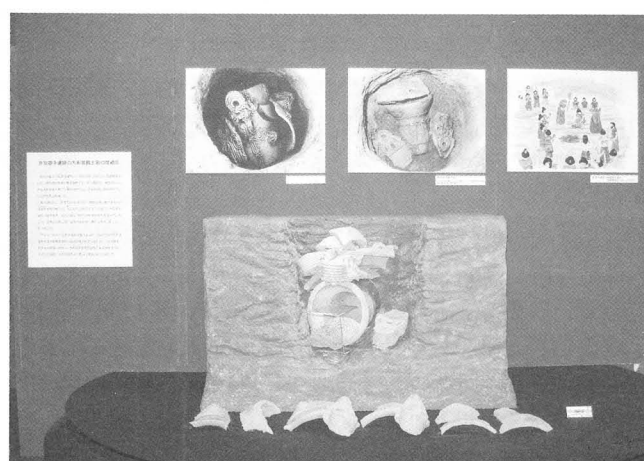
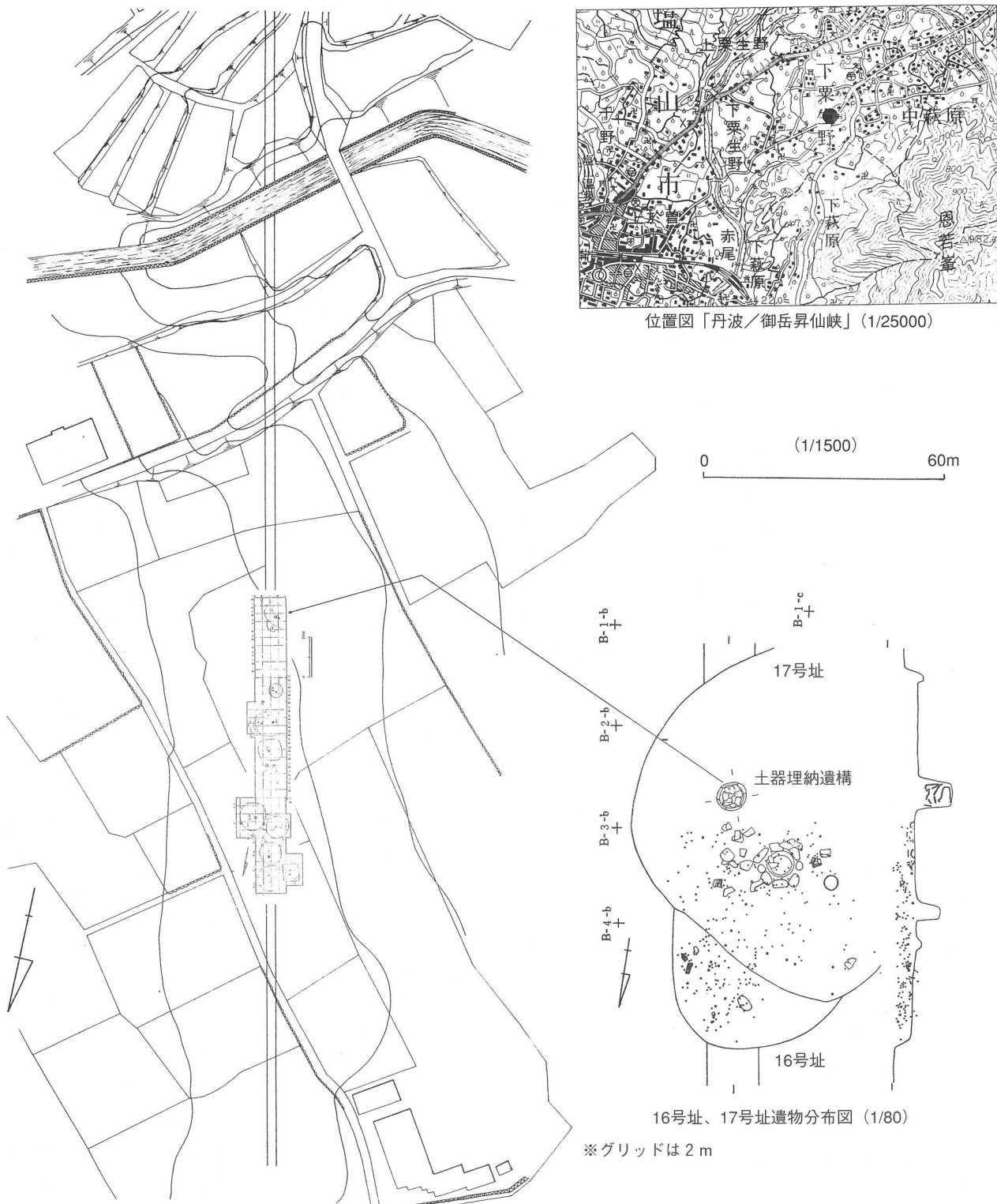


写真2 埋納状態の復元展示（第26回考古博物館特別展）



第1図 安道寺遺跡と土器埋納遺構の位置図 (小林・里村1978より)

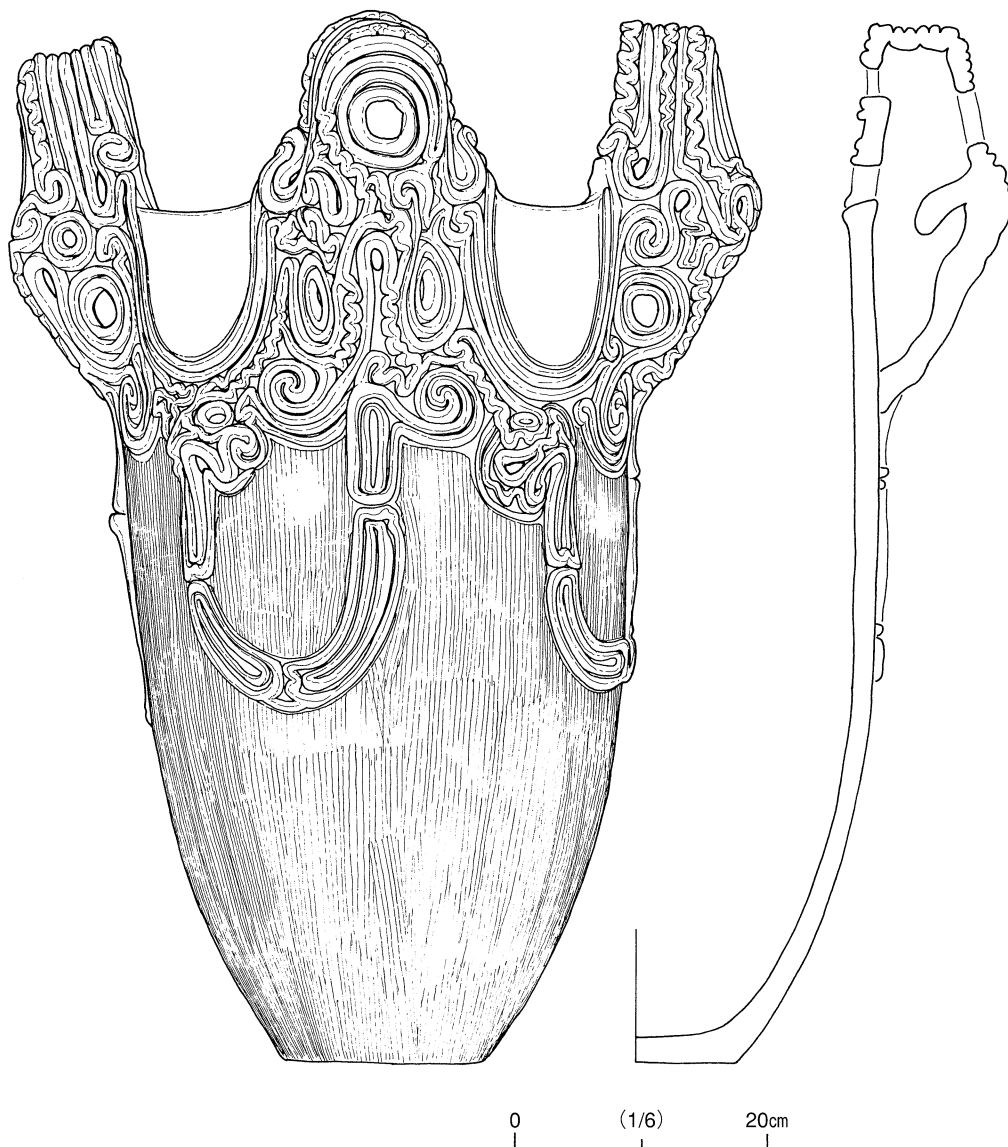
のなかで、実測図を提示した (小林広和2003、P111)。その後、大幅な修復を行っており、小林氏の図はそれ以前のものである。

今回の特別展でおこなった写真実測図が第2～4図である。第3図には渦巻把手状装飾部分のみを側面図・裏面図の4面実測図で示した。また、展開写真を利用して作図した展開図を第4図に示した。

この土器は、高さ82cm、口縁部径が44cm、底径が16cmである。

文様は、粘土紐添付後に両側を押さえて施文した丈の高い隆帯により、弧状、波状、渦巻状、同心円状の文様を構成要素とする。隆帯は三叉することはあるが、十字には交差しないように施文されている。

地文は縦方向の条線で、底部端にいたる胴部下半全体に



第2図 A個体実測図

施文されている。隆帯および文様周囲を縁取る浅い沈線の施文後に施されている。数本のヘラ状工具を束ねたもので施文したと考えられ、上下方向に3段階程度に分けられて施文されている。

渦巻把手状裝飾部分は高さ30cm前後、厚さが10cm前後である。A 1～4まで番号を付した（第3図）。中空で、粘土板や粘土紐を組み合わせて構築している。第2図の断面図は、正確に測点できたものではなく、穴からの観察によっておよそ推定される状態を図化している。

その上部に太鼓を載せたような独特の文様があり、この土器を特徴づけている。表裏に貫通するような大きな穴が開けられており、周囲には2～3重の同心円が施文されている。渦巻把手状裝飾下部には双環の把手状文様があり、これも2～3重の隆帯による同心円文がめぐる。渦巻把手状裝飾内面側下部にも楕円が穿たれ、1重の縁取りがめぐる。他にも、渦巻把手状裝飾部分に縁取りがある小さな穴があるが、他から連続してきた隆帯がめぐる場合が多い。

渦巻把手状裝飾下端左右に、渦巻状あるいは巴状の文様

が施文されている。右側が左巻、左側が右巻となり（A 1）あたかも芸術家ダリのひげのような形になるものと、右側が右巻、左側が左巻となるもの（A 2～4）とがある。この文様もこの土器を特徴づけるものである。

渦巻把手状裝飾部分は、3～4重の弧状隆帯とそれに囲まれた口縁部を含むよく平滑調整がなされた無文部によって連結されている。

弧状隆帯の下端に、半球状で中空の裝飾突起を付している。裝飾突起には穴が3ヶ所開けられており、隆帯の縁取りがあり、同心円とヘアピン状のものがある。

裝飾突起は、腕骨状の文様によって渦巻把手状裝飾部分下部と連結している。大きな文様部分の周囲には浅い沈線で縁取りされている。

B個体

B個体は、実測図・写真を初めて提示する。A個体と同様な渦巻把手状裝飾で、4点あり、B 1～4と

番号を付した（第5図）。A個体と同様に、高さ30cm前後、厚さ10cm前後である。

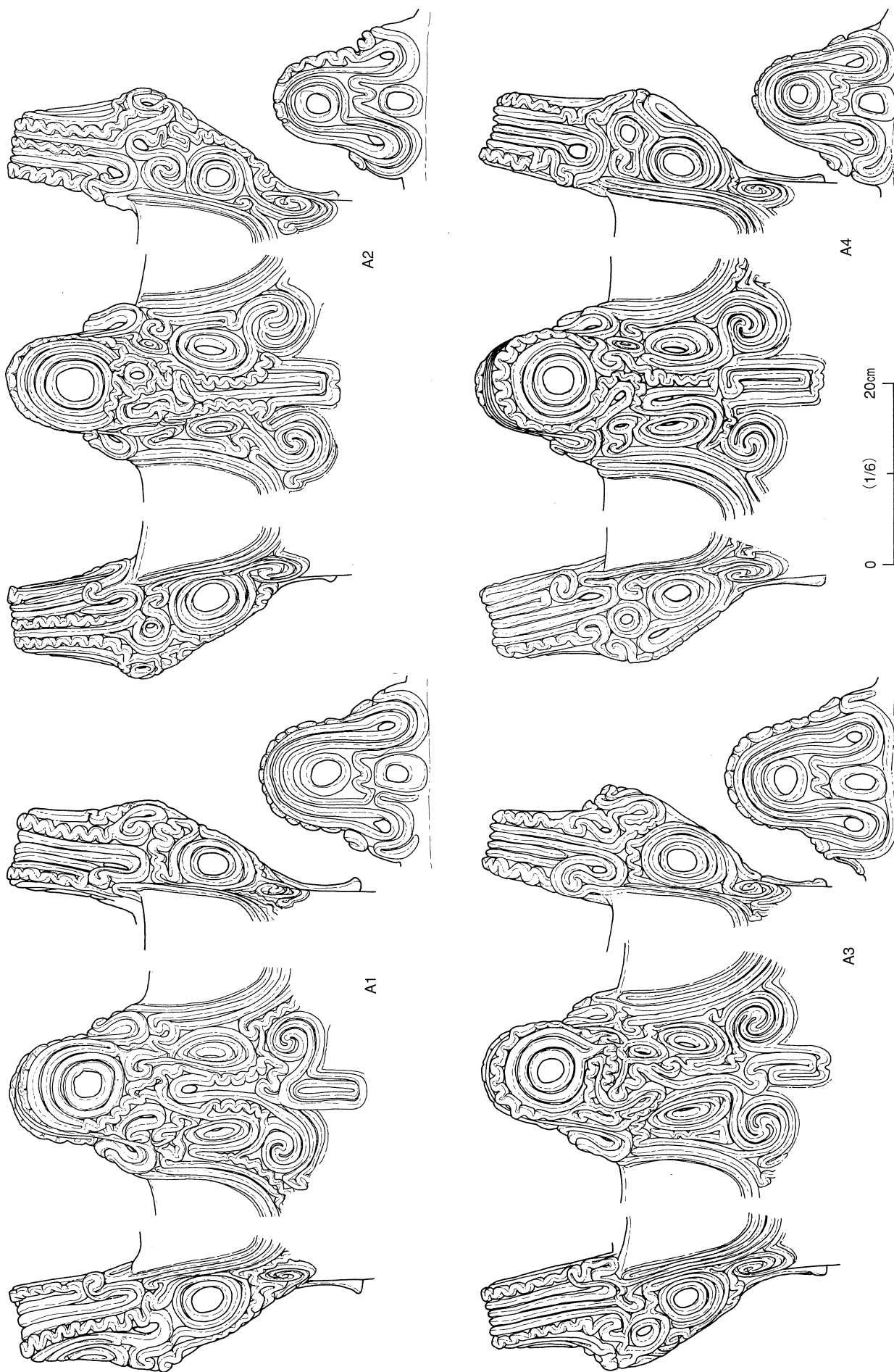
A個体との違いは、特徴的な太鼓状文様の表側の表現が不明瞭で、穴が正面から大きく見えない点である。穴の縁取りの同心円隆帯文がA個体では2～3重であったが、B 1・2では1重で小さく、B 3・4では欠損で不明な部分が多いものの、B 3では申し訳程度に縮小していることが明らかである。

中央部のうねるような文様要素が勢力を増しているような印象を受ける。

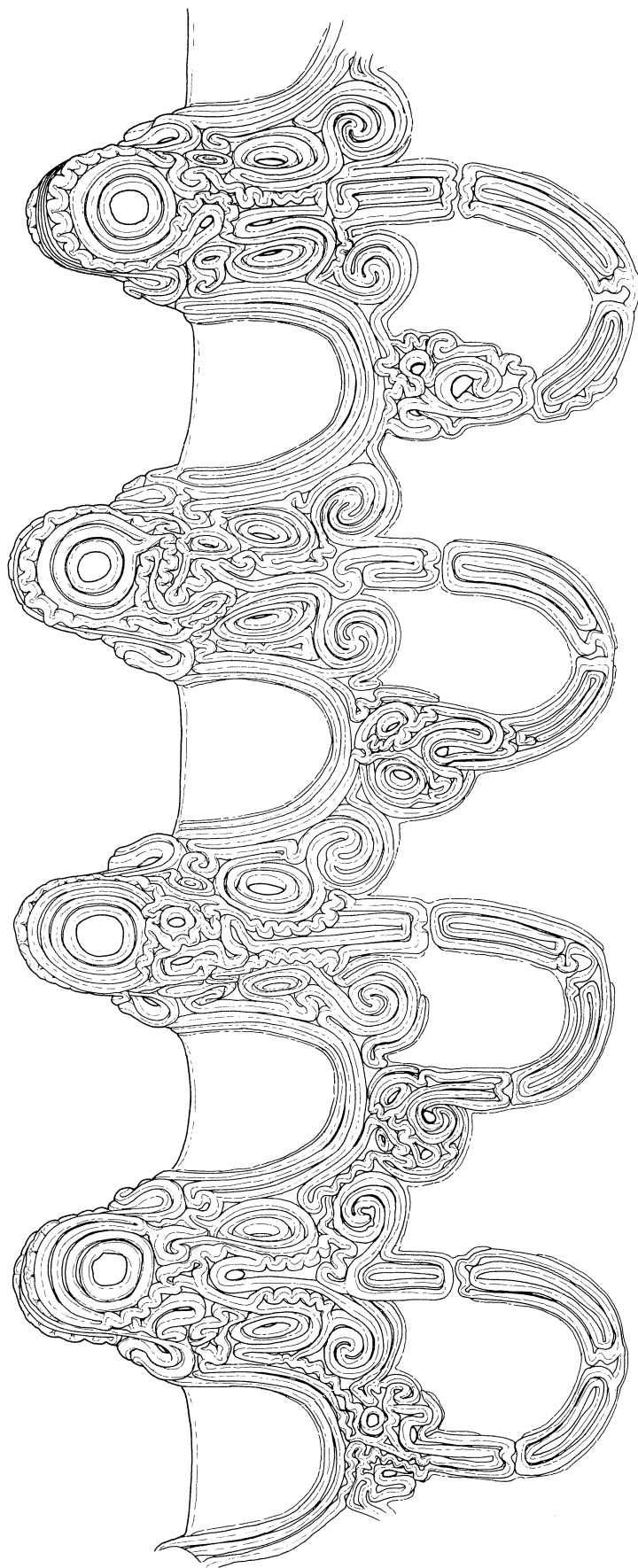
裏面の文様構成はA個体とほぼ同じであるが、口縁部との境界線が明瞭で、深い沈線として施文されている。

また、穿たれた小孔に隆帯が入り込んで切れるような施文がみられる。

太鼓状の文様はA個体を特徴づける文様要素であるが、2個体を製作した時間のなかで、変化が著しい要素であり、変化の新旧関係は不明であるものの、土器文様の変化を考察するには興味深い資料である。



第3図 A个体渦巻把手状裝飾実測図



第4図 A個体展開図

なお、B 3・4 資料は上端部を欠損する。土坑内で、風化によって消失したらしい。

C 個体

C 個体は、報告書で実測図が提示されている（P 55）が、改めて写真実測をおこなった（第 6 図）。高さ 32cm、口径 32cm、底径 12cm を計る。展開写真は撮影していないが、4 面撮影した実測写真から、報告書の展開図を参考にして作図した。

キャリバー状に開いた口縁部が無文で、頸部以下に、細い粘土紐の添付による波状文、粘土紐添付後に半裁竹管状工具でナデ処理された隆帯、体部を直接、半裁竹管状工具でナデ処理された隆帯、細い半裁竹管状工具で施文された集合沈線による地文によって構成される。

頸部には断面三角の隆帯を施文した上に、細かい波状添付文が上下に施文される。

さらに、ヘビの頭部を想起させるようなコの字状とへの字状の太い添付文が、断面三角の隆帯上に施され、波状添付文で縁取られた弧状と直線状の集合隆帯が垂下する。

コの字状とへの字状の添付文が、弧状集合隆帯で結ばれた文様が 1 単位、コの字状とへの字状添付文が、弧状集合隆帯で結ばれた文様が 1 単位、コの字状添付文から直線状集合隆帯が垂下し、中央にトンボの羽のような添付文がみられる文様が 1 単位、への字状添付文から直線状集合隆帯が垂下する文様が 1 単位の、合計 4 単位がある。

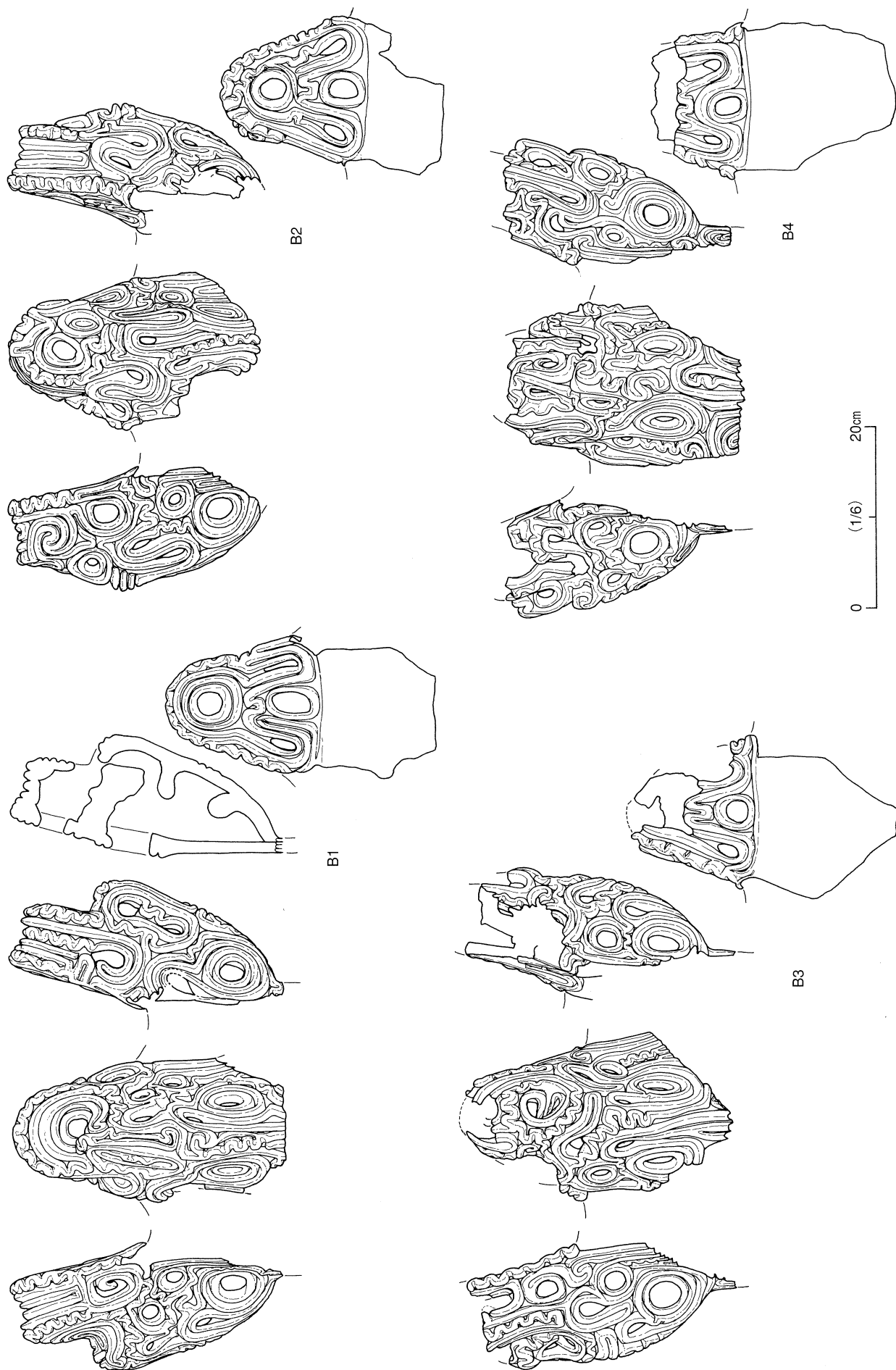
このコの字状とへの字状の添付文は、断面三角隆帯と垂下する集合隆帯とそれを縁取る波状添付文の後に施文され、断面三角隆帯上の細かい波状添付文はその上に乗って施文されている。

内面の保存状態がよく、特に念入りに平滑処理されているのが印象的である。

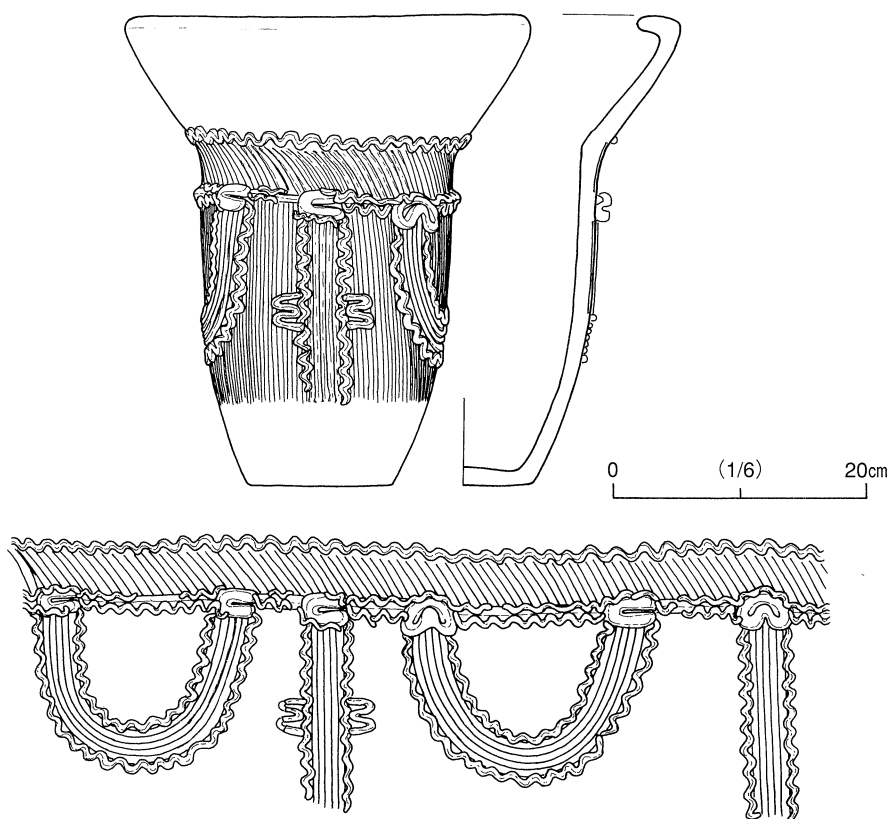
3. 埋納状態の再検討

実測図を作図した後に、A 個体については欠損部位を確認し図化した（第 7 図）。修復時に推定復元された部分である。

また、報告書の図面や、当館で保管する写真資料を参考に、現物に残る割れ線を確認しながら、埋納されていた状態の破片の範囲を図化した。さらに、それぞれの破片はどの位置から出土しているかを、写真と図面によって照合し、番号を付した（第 8 図、A 個体は A ナンバー、B 個体は B ナンバーの通し番号）。これらの作業によって、つぎの 2 点が判明した。



第5图 B个体实测图



第6図 C個体実測図

- ① 写真や図面で明確に確認できる渦巻把手状装飾は7点であり、1点が明瞭に記録化されていない（B2資料）。
- ② 欠損部位に接合すべき小破片数点が未接合のまま残されていることが判明した（A2破片の渦巻把手状装飾部分向かって右側第7図写真部分）。

①については、残る資料の部位と、写真に写る部分との照合作業により、C個体に挿入された状態であったことが推定された。そこで、埋納過程を復元すると、以下のとおりである（第8図）。

埋納1段階

C個体の安置。C個体を土坑内に横たえ、B2内面を上にして、上端をC個体内に挿入、ないしは横たえる以前に挿入して一緒に安置する。

埋納2段階

B個体の安置。C個体の底部側に、B個体3個を安置する。左にB1（内面側を上、上端をC個体口縁部方向）、右下にB4（内面側をC個体側にむけて横位、上端をC個体口縁部方向）を安置する。さらに、B4の上にB3を重ねる（内面側をC個体に立てかける、あるいは上に乗せる、上端をC個体口縁部方向）。

埋納3段階

A個体上半部の安置。

- ① A2の渦巻把手状装飾主軸方向をC個体主軸と90度交差するようにし、渦巻把手状装飾上端をB1の上に重ねて安置。その際、A11-4がB3・4の外側に割れ落ちた可能性がある。

- ② A1を①の上に重ねて安置する。主軸は同方向だが、渦巻把手状装飾上端の方向が反対。
- ③ A3を②に重ねて安置する。A1渦巻把手状装飾上端方向の左側に、渦巻把手状装飾上端方向は②と反対、渦巻把手状装飾左側が上を向く形になり、渦巻把手状装飾がC個体口縁部にふたをするような形で落ち込む。この際に、A5が分離し、A11-3がB3・4の外側に割れ落ちた可能性がある。
- ④ A4を②に重ねて安置する。A1渦巻把手状装飾上端方向の右側に、渦巻把手状装飾上端方向は③と反対に向ける。この際に、A11-1がB3・4の外側に、A11-2がB1の外側に割れ落ちた可能性がある。

なお、③、④の順序は明確な証拠はないものの、後述する埋納要点からして推定した。

埋納4段階

A個体下半部の安置。

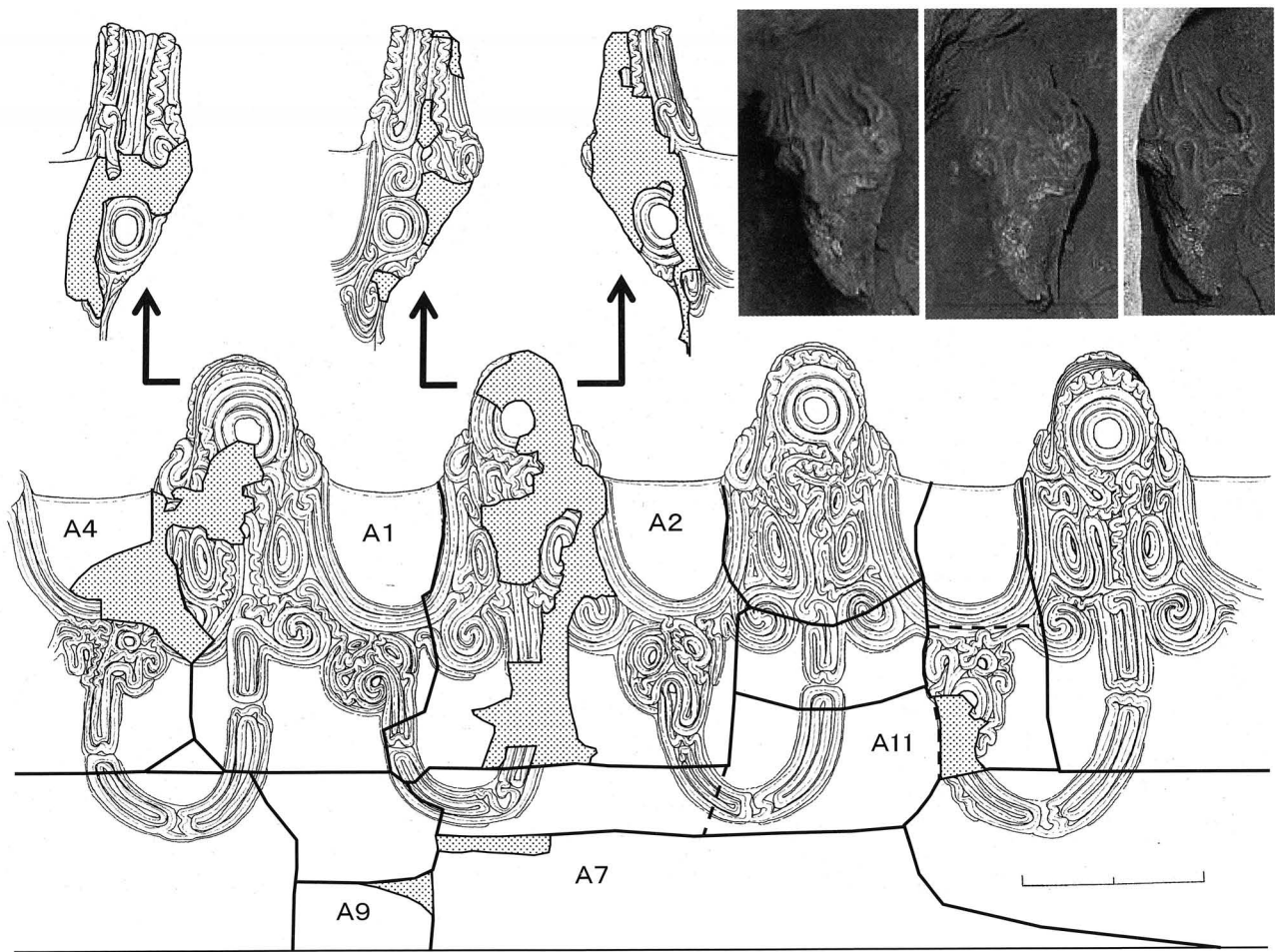
- ① A6を安置。その際にA8が割れ落ちる。
- ② A9・10を安置。
- ③ A7を安置。
- ①～③は底部方向を同一にし、A1上端方向に底部を置き、覆うようにしている。
- A6・7は、埋納後の土圧で破断し、写真でみるようなその場での割れ状態を示している。

4. 埋納行為の要点

このように復元された埋納行為の要点をまとめると以下のようなになる。

- ① 完全個体（C個体）、分割完全個体（A個体）、部分個体（B個体）の3種類を埋納している。
- ② 完全個体に部分個体を関連づけている。
- ③ 部分個体の1つは挿入し、他を完全個体胴部3方に添える。
- ④ 部分個体上部方向を挿入と他とを上下に入れ替える。
- ⑤ 分割完全個体を、②～④の上に、完全個体と軸方向を90度ずらして、封ずるように安置。
- ⑥ 分割個体の埋納時に軸方向を上下入れ替える。完全個体や部分個体から見ると、上部方向を左右に入れ替えているとも表現できる。
- ⑦ 最終的に分割個体底部で全体を覆う。

個体の残し方の3様態、完全と不完全のセット関係、完全個体への挿入という行為、安置方向をセット関係では上



第7図 A個体の欠損部位（網点部分。修復で文様が推定復元されている。写真と復元の違いに注意。）

下すなわち180度方向で組み替え、別過程では90度組み替えるといった、埋納作法と呼ぶべき要点が抽出される。

さらに注意すべきは、報告書で記載があるように、C個体の「中・底部付近には、焼土塊が検出」されている点である。この記述によれば、土器の中位まで焼土が充填された状態が推定される。B2資料は、焼土が充填された土器内に挿入されたことになり、土が詰められた土器の中に埋められた状態で安置された可能性もある。B2資料やC個体内面が非常に良好な保存状態なのも、空洞状態で埋納されたのではなく、土が詰められた状態で安置されたからかもしれない。

以上の過程で、A個体の破片が土坑底部に落ち込むような状況が復元でき、土壌の封入はすべての安置が終了した後に行われたと推定される。

さらに、A・B個体の間は、当初の封入土壌が入らず空洞となった可能性があり、A2資料や、B3・4の一部がもろくなってしまった原因のひとつではないかと推定される。ただし、風化消失は空洞部にある全てに見られるわけではなく、有機物などの物質を局所的に付着させていた可能性も考える必要があろう。

おわりに

安道寺遺跡の調査は、平成20年度末で退職される小林広

和課長の若き日の成果である。こうして再分析に耐えうる資料を残された小林氏の精緻な業績と、また日頃からのご指導にも心から感謝したい。学恩に感謝しつつ、本稿を捧げたい。

また、同じく平成20年度末で退職される新津健所長には、ことばに尽くせないほどの様々なご指導・ご鞭撻をいただいていた。今日こうして活動ができるのも、新津所長の暖かい人柄があったからこそと、ただただ感謝申し上げたい。お二人には、今後とも変わらずご指導いただけるようお願い申し上げる次第である。

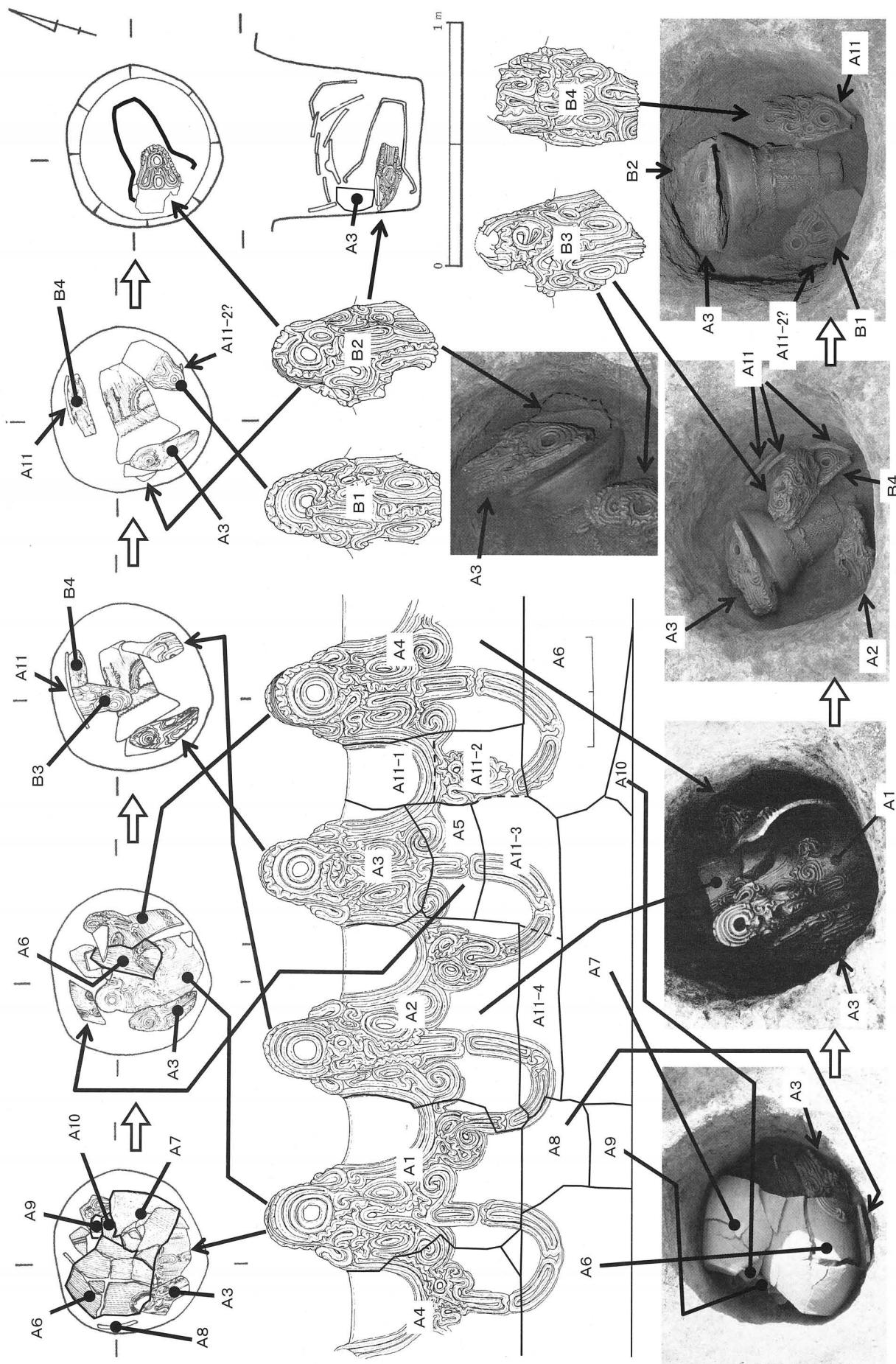
小林広和・里村晃一1978『安道寺遺跡調査報告書』山梨県教育委員会

小林広和1986『原始時代』武川村誌（P203～213）武川村

小林広和1987『縄文時代の土壌について』『研究紀要』山梨県埋蔵文化財センター・山梨県立考古学博物館

小林広和2003『渦巻把手状装飾土器の展開—渦巻突起連結土器から渦巻把手土器へ—』『研究紀要』山梨県埋蔵文化財センター・山梨県立考古学博物館

山梨県立考古学博物館2008『埋められた財宝—大形装飾土器、銅鐸、そして埋蔵金—』第26回特別展展示図録



第8図 埋納状態検討図（平面図は、小林・里村1978より白ヌキ矢印は、発掘や作図作業の進行過程を示す。）。